【研究論文】

保育実習（施設）の意義について

― 実習を終えた学生のアンケートから見えてくるもの ―

服　部　次　郎*
谷田貝　雅　典*

要　旨

保育実習（施設）の意義については、学生が実習のあと「大いに意義がある」と述べたり、実習の体験を通じて「自分自身が変化した」と言ったりすることが多いことを実習後の指導を通じて以前から感じていた。今回、このことをアンケート調査および統計的手法を用いて分析した。その結果、これらの仮説を裏付けることができるとともに新たな事実を見出すこともできた。

Abstract

As for the meaning of student training for care-workers at social welfare facilities, I have had a feeling from my experiences that student trainees are able to grasp the value of the student training and that they are able to feel self-change through training . So on this thesis we try to verify our assumptions by using questionaire and statistical analysis and we could prove our assumptions and also have had new findings.

はじめに

筆者の一人、服部は岡崎女子短期大学で保育実習（施設）を担当し、現在７年目となる。偶然ではあるが幼児教育学科第一部の学生全員を１年生から２年生にかけて指導し、事前指導、見学実習、本実習、そして事後指導の全てを一人で受け持っている。その中で、保育実習（施設）の意義についていくつか重要と思われることを感じていた。例えば、施設での実習に対して、実習前は大きな不安を感じていた学生が、実習を終えた後の事後指導でのアンケート等において、施設実習は「とても意義があった」と答えたり、施設実習を受ける前と、受けてからの自分の変化について「とても変化した」と答えたりする場合が多かった。保育者を目指すものにとって施設実習が保育所・幼稚園実習と同様に大きな意義を持つと感じていた筆者としては、これを客観的に裏付けたいと考えた。

１　研究の目的

上に述べたことを具体的に証明するために、実施したアンケートの内容を整理し、次のような仮説を立て、その妥当性を統計的手法も用いて検討していくこととした。

⑴施設実習を行うことについて多くの学生が不安を感じているが、６日間の宿泊実習終了時には、「施設実習は意義があった」、また「実習を通じて自分が変化した」、と感じるであろう。

⑵施設やそこで暮らす児童、利用者に対するイメージが変化するであろう。具体的にはマイナスのイメージ（例えば、児童のイメージが暗い、障害者の場合は怖い存在など）がプラスに変わるのではないか。

⑶実習施設において実習生が対応する対象者が、児童であろうと、障害のある大人（利用者）であろうと、基本的対応や実習をする意義には大きな違いがないことを学ぶであろう。

⑷上記⑶にも関連するが、自分の実習する施設が、障害者（大人）の施設である場合、保育者を目指しているのに何故、障害者の施設で実習をしなければならないのかと思う学生も実習前にはいるようである。しかし実際に実習をしてみることで、その考え方が変わるのではないか。

⑸施設における実習を通して、実習生自身が、自分がいかに恵まれた環境で生活しているかを感じ取るのではないか。

⑹将来自分が施設で生活している児童や利用者に対

* 岡崎女子短期大学幼児教育学科

して、何か出来ることはないかと感じたり、また自分自身が施設の職員として働いてみたい、という気持ちが生まれたりするのではないか。

⑺大学の授業において、「保育実習（施設）」の授業は当然のこととして、どのような科目が実習生にとって、役に立ったと感じているのか、また保育実習（施設）の授業では、どのような内容が役に立ったと感じるのかを承知しておくことは、施設実習担当者として大切なことである。筆者はこれまでの経験から、授業科目としては「保育実習（施設）」の他に「養護原理」などが役に立つこと、そして保育実習（施設）の授業においては特に「先輩の体験談」が役に立つと考えて授業構成してきたが、そのことは学生にも支持されているのではないか。

以上のように、筆者服部が経験的に感じていたことについて、施設実習を終えた学生にアンケート調査を実施し、その結果を項目別にまとめて分析するとともに、もう一人の筆者谷田貝が統計的手法を用いて結果を客観的に分析することで仮説を検証することを今回の論文の目的とした。

2　研究方法

2008年および2009年において、１年生の２月から３月にかけて実習した学生と２年生の７月から８月に実習を終えた学生に対して、事後指導の時間でアンケート調査を実施した。それらの基礎データから、特に今回は「実習の意義」と「自分の変化」に関する項目に焦点をあて詳細な統計的分析を行いつつテーマについて研究するとともに、その他の項目についても統計的処理はしないが、調査し検討を加えて今後の研究の参考資料とする。

3　調査・分析の結果

⑴アンケートの「実習の意義」と「自分の変化」について

①　図１は、２年間で計４回実施した実習事後アンケートにおいて、「実習は有意義であったか」（以後、実習の意義と称す）および「実習の前後で自分の意識は変化したか」（以後、自分の変化と称す）の質問項目に対し、５段階評定尺度法で回答を得た結果を百分率で示した。

［2008年における実習の調査結果より］１年（２～３月：春）の実習生においては、115人中79人（69%）が大変意義があったと感じ、28人（24%）がある程度意義があった、と感じている。どちらでもないが７人（６%）、あまり意義がないというものも１人（１%）いた。また自分の変化については、115人中71人（60%）が大変変化した、36人（31%）がある程度変化した、そして10人（９%）がどちらともいえないと答えている。次に、５か月後に実習した２年（７～８月：夏）の実習生においては、103人中62人（60%）が大変意義があった、33人（32%）がある程度意義があった、８人（８%）がどちらともいえない、と答えている。自分の変化については、103人中36人（35%）が、大変変化した、54人（62%）がある程度変化した、そして11人（11%）がどちらともいえない、そして２人（２%）があまり変化していない、と答えている。

［2009年における実習の調査結果より］１年（２～３月：春）の実習生では、100人中88人（88%）が大変意義があったと感じ、12人（12%）がある程度あった、と感じている。また、自分の変化については、100人中65人（65%）が、大変変化した、31人（31%）がある程度変化した、そして３人（３%）がどちらともいえない、１人（１%）はあまり変化していない、と答えている。次に、５か月後に実習した２年（７～８月：夏）の実習生においては、113人中75人（66%）が大変意義

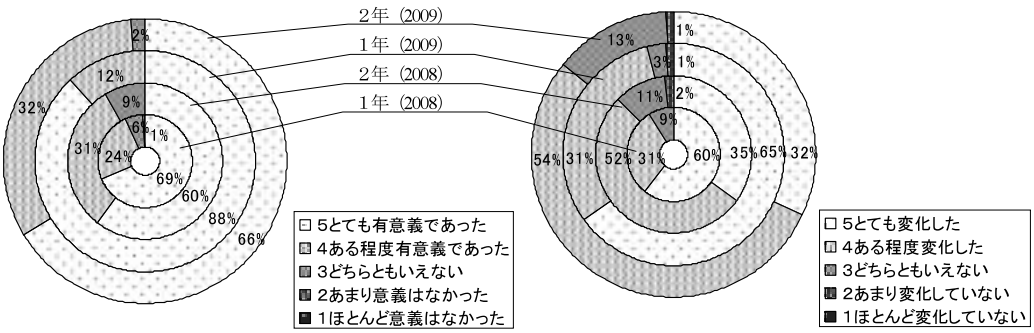

図１　実習の意義と自分の変化についての調査結果

があった、36人（32%）がある程度意義があった、２人（２%）がどちらともいえない、と答えている。自分の変化については、113人中36人（32%）が、大変変化した、61人（54%）がある程度変化した、そして15人（13%）がどちらともいえない、１人（１%）が変化していない、と答えている。

以上より、各回とも質問項目に対し肯定的な回答である評定５・４の値が多いことがわかる。特に、2008年および2009年とも自分の変化に対する回答において、実施時期（１年春と２年夏）における差異が認められる可能性があるので、以後の分析において、実施時期についても評価する。

② 図２は、実習の意義と自分の変化に対する回答の平均値を、実習の実施時期および配属施設別に母集団を分けて示したものである。

図２における実習の意義と自分の変化に対する「全体」（N=437）の平均値が４を超えていることから、５段階評定の中央の尺度値となる評定３より大きい値であるかを明らかにするため、定数3に対するt検定（平均値と定数のt検定：両側検定）を実施した。結果（平均±SD）、実習の意義は4.67±0.56（t(436)=62.08,p<.001）、自分の変化は4.36±0.70（t(436)=40.73,p<.001）となり両結果とも0.1%未満で評定３との差は有意であった。本結果より、１⑴の項で述べた仮説は正しいことが示された。

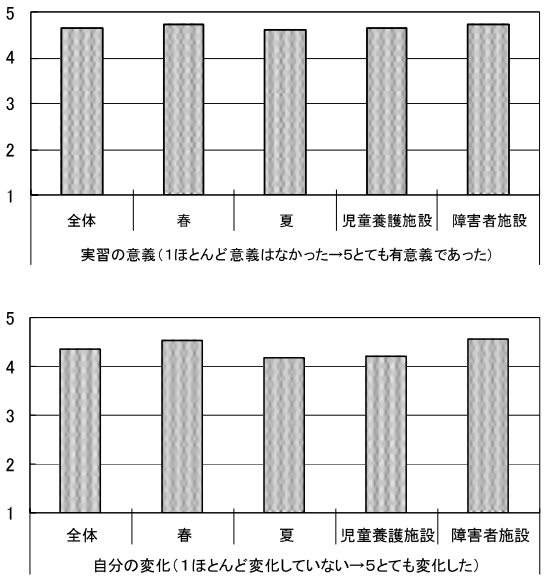

図２　時期および施設別アンケート結果の平均値

次に実施時期および配属施設別における、実習の意義と自分の変化に対する回答平均値の差異を分析する。実施時期（春と夏）におけるそれぞれの回答平均値のｔ検定の結果を表１に示す。表１より、自分の変化に関して夏に比べ春の方が0.36ほど有意に高く、実施時期による差異（ただし、値は小さい）が認められる。また、実習の意義に関しては夏に比べ春の方が0.13ほど有意に高い値であるが、実質的な差（５%以上）とは言いがたい値である（このように小さくても有意な差として検出されたのは母数が大きかったためと考えられる）。以上より、３⑴の項で述べた、実習の実施時期によって自分の変化にやや差が認められることがわかった。

表１　実施時期別に対する各回答平均値のｔ検定結果（両側検定）

	春（N=215）		夏（N=222）		
	平均	SD	平均	SD	ｔ値
自分の変化	4.54	0.63	4.18	0.72	5.56***
実習の意義	4.73	0.54	4.60	0.56	2.37*

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

配属施設別におけるそれぞれの回答平均値のｔ検定の結果を表２に示す。表２より、自分の変化に関して児童養護施設など養護系施設（以後養護系施設と称す）に比べ知的障害者更生施設など障害系施設（以後障害系施設と称す）の方が0.38ほど有意に高く、配属施設別による差異（ただし、値は小さい）が認められる。また、実習の意義に関しては養護系施設と障害系施設において有意な差は認められなかった。以上より、配属施設によって自分の変化にやや差が認められ、実習の意義に関しては有意な差が認められないことがわかった。このことは、実習の意義に関し、１⑶で述べた仮説が正しいことが示された。また、１⑷における考え方の変化は、小さな値ではあるが、自分の変化の差に起因していると予想される。よって、以降の分析で自分の変化と実習の意義間の相関や規定因を分析し因果関係を明らかにする。

表２　配属施設別に対する各回答平均値のｔ検定結果（両側検定）

	養護系施設（N=240）		障害系施設（N=197）		
	平均	SD	平均	SD	ｔ値
自分の変化	4.19	0.73	4.57	0.60	5.82***
実習の意義	4.63	0.58	4.71	0.54	1.51

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

③ 表３は、実習の実施時期および配属施設別に母集団を分け、自分の変化と実習の意義に対する相関係数を示した。表３より、すべての値に対して有意な正の弱い相関が認められ、なんらかの因

果関係が予想される。よって、自分の変化が大きかった実習生は実習の意義に影響を与えるか検証する。表４は、実習の意義を従属変数、自分の変化を独立変数とした回帰分析を各母集団ごとに行い、実習の意義に対する自分の変化の規定力を示したものである。表４より、各母集団の自由度調整済R^2は、値が小さく分析精度が高いとはいいがたいが有意であった。各母集団の規定力はすべて有意であり、正の値であった。よって、各母集団において自分の変化が大きかった実習生は、実習の意義も大きいと感じることがわかった。各係数を比較すると、実施時期では夏よりも春の方が規定力は大きく、３②の結果とあわせて考察すると、夏よりも春の方が自分の変化を大きく感じられ、かつ自分の変化によって実習の意義も大きくなることから、実施時期は春のほうがやや効果的であることがわかった。また、配属施設別では障害系施設に比べ養護系施設のほうが自分の変化によって実習の意義も大きくなることがわかった。ただし、この結果は、特に３②で示した、養護系施設に比べ障害系施設の方が自分の変化がやや高い値であり、かつ実習の意義に差が認められないことを考慮すると、１⑷で示した仮説はおおむね正しく、実習後に考え方が変化し、実習の意義を見出せていることがわかった。

⑵アンケートの自由記述欄について

次に、統計処理とは別に、施設実習事後指導アンケートの学生の記述の一部を取り上げて、先にあげた仮説について検討する際の資料とした。

（施設実習事後指導アンケートより［ここでは主として、2009年の春と夏の実習を終えた実習生のアンケートを利用する］）○印は養護系施設、△印は障害系施設での実習

①施設実習の意義について

2009年春実習（１年生が２月から３月にかけて実習）

○施設の実態、施設の生活についていろいろと知る事ができた。

○施設について暗いイメージを持っていたが、実際は違い、子どもたちは明るい子が多いことが分かった。

○初めての体験（おむつ交換・食事介助など）をしたことでいろいろと学んだ。

○現場で実践と失敗を何度もすることで多くのものを得た。

○記録を書くことを通して振り返りができた。

2009年夏実習（２年生が７月から８月にかけて実習）

○保育園などでは見られない子どもの姿やいろいろな事情を持った子どもたちのことを知り勉強になった。

○様々な年齢の子どもたちと関わる経験ができ、施設がどのような所なのか分かった。

○初めての場所ということで緊張も多くありましたが、幼稚園や保育園と全く違う生活の流れですごく勉強になりました（施設という場は、子どもにとって「生活する場」なので、食事やベッドは当たり前にありました。また、その中にいる保育者は、親のようでもあり、お姉ちゃん、妹でもあるので、その点も、幼稚園・保育所とは違いました。）

①施設実習を受ける前の自分と受けてからの自分の変化および自分が変化したきっかけ

（理由）について

2009年春実習（１年生が２月から３月にかけて実習）

表３　各母集団における自分の変化と実習の意義に対する相関係数

全体	春	夏	養護系施設	障害系施設
.37***	.38***	.33***	.40***	.31***

***p<.001

表４　各母集団の実習の意義に対する自分の変化の規定力（非標準化係数）

	実習の意義				
	全体	春	夏	養護系施設	障害系施設
自分の変化	.30***	.32***	.27***	.32***	.28***
自由度調整済 R^2	.13***	.14***	.11***	.15***	.09***

***p<.001

△障がいを持った方に対する意識が変わりました（実習前は公共の場で、障がいを持った方がいると、少しだけ怖かったですが、今は少しも怖くありません）→きっかけは、利用者の方々の笑顔や優しさです。[仮説(2)を支持する内容：以後、(2)と称す]

△実習に行く前までは、やはりこころのどこかに知的障害者の方への偏見があったような気がします。利用者の方と関わったことによって偏見をなくすことができました。また相手の気持ちになって考えるということをこころがけるようになりました→理由は、１週間利用者の方と接して、とても楽しい時間を過ごすことができたことと、職員の方を見ていて、楽しそうに仕事をしていたからです。(2)

○自分がどれだけ甘えているか，あたり前に毎日好きな時間にテレビを見たり、コンビニへ行けたりすることのありがたさを知り、いろいろなことに感謝をして毎日過ごせるようになった→子どもたちの生活の全てにおいて、見直す点がたくさんあった。例えば、自分の食べたものはしっかりと洗い、中高生は自分の洗濯物は自分で洗うなど、自分より年下の子どもたちが自分より何倍も自立している姿を見て変化した。(5)

○今までは保育園や幼稚園の保育者になることだけ考えていましたが、少しだけ施設の保育者もよいと思うようになった→理由は、施設の子どもたちみんなと仲良く過ごせたからです。(6)

○実習をしたことで、施設の保育士になりたいぐらい施設に魅力を感じた→保育園の保育士は「おはようございます／さようなら」だけだけれど、施設では「おはようございます／おやすみなさい」と、一日の最後まで子どもたちと一緒に生活をする。子どもの親代わりの役目はとても重いけれど、その代わり、自分に対する信頼感や安心感などを感じてもらえて、とてもやりがいがあると思った。(6)

○（乳児院で言葉での表現が少ないため）一人ひとりの子どもに対して、「どうして泣いているのかな」「こうしたら良くなるかな」などと考えるようになった→ある乳児を抱いていて、泣き出してしまいなかなか泣き止まず、ミルクをあげても泣き止まず、つまらせてしまい、不安のままその子どもと関わっていた。言葉をかけてもうまくできずにいた。職員の方がすぐ抱き上げ、顔を近づけたりして，あやし方もまねしたいぐらいうまく、抱き方もその子どもにあった抱き方をしていて、最初からできる訳がないとわかっていても自信をなくしてしまった。反省会の時に職員の方が「不安になるよね。でもここで失敗しとかなきゃあなたのためにならないよ。保育の現場に答えはいくつもある。１＋１は３にも４にも10にもなることだってあるんだよ。」とおっしゃっていただいたことがきっかけである。

○思春期の子に対して接する自分の対応→男子部屋担当で最初は話すことができなかったが、先生が「本当はみんな興味があって話したいと思っているんだよ」と言われ、話しかけてみると、話をしてくれるようになった。先生の一言で自分が変化したと思う。

△実習に行ってから、周りの風景、花が風で揺れる姿、雲の形など、常にいろいろな所に目を向け、自分の心が柔らかくなるようこころがけるようになりました→きっかけは、以前、保育者をしていた施設の方の「自分のこころさえ美しく、まっすぐに見る目があれば、人にも気持ちは伝わるし、伝えられる」という一言です。

△人と接する仕事の大変さや難しさ、責任の重さややりがいを改めて実感することができました→職員の方が毎日細かく健康をチェックし、報告している時や、すごく私を受け入れてくれていた利用者の方が、次の日には情緒が安定せず、うまくコミュニケーションがとれなくなってしまった時などに改めて気づかされました。

△実習に行く前は、障害のある人を見ると体を避けてしまったり、やはり特別な目で見てしまっていたけれど、実習を通して、町でそういう方を見かけても、避けたり、特別な目で見ることがなくなった→理由は、１週間の実習を通して利用者の方と触れ合っていくうちに、障害のある方も私たちと変わらないし、何かをすることが不自由なだけなんだとわかったから。(2)

△利用者の方の気持ちがわかった。変な目で見ずに、私たちと同じ人間であるとわかった。特別な目で見る事がなくなった→きっかけは、利用者の方との触れ合い・コミュニケーションや介護体験であった。(2)

2008年春実習（１年生が２月から３月にかけて実習）

△自閉症の大人の方と接するのは初めてだったので、自分の中で壁がありました。実際に接して

みると大人の方も子どものほうも変わらないことが分かり、考え方が変わったと思います→職員の方に常に「お手伝いさせていただく気持ちを持つことが大切」と言われたことがきっかけです。今まで子どもに対して、「支援してあげる」気持ちで接していたと感じ、大人の方でも子どもでも同じと思いました。(4)

2009年夏実習（２年生が７月から８月にかけて実習）

○施設に対する考え方が変わった→理由は、毎日ひとつの家族のように暮らしていて、いけないことも本当の子どものように職員の方が叱っていて愛情を感じたため。(2)

△知的障害者の方は、初めは「怖い」というイメージがあったのですが、そのようなイメージが全くなくなりました→理由は、利用者の方と実際に関わったからです。皆さんがとても笑顔が素敵で、私も自然に笑顔になりました。(2)

○自分の生活が家族によって支えられていて、幸せなことだと思うようになりました→理由は、小５の女の子が、お母さんが５月に亡くなったことを話してくれたため。(5)

○自分が母親に頼っていた部分がよく分かり、なるべく自分でやろうと感じることが多くなった→理由は、子どもたちが自分で洗濯物をしまったりなど、自分でやらなければならないということが年齢が高くなるにつれて多くなっていると感じたため。(5)

○自分が今後保育者になった時、少しでもわかってあげられる部分ができた→いろいろな事情を抱えた子どもたちがいたということや、その子どもたちの姿を知れたため。

○言葉使いに気をつけようと思うようになったり相手の立場に立って、相手の気持ちを考えたりするようになった→きっかけは、実習でいろいろな子どもたちと関わった時に、子どもたちから言われた言葉です。

(3)施設実習と授業との関係について

（施設実習においては、大学でのどの授業の、どのような内容が役に立ったかという質問）

2009年春実習（１年生）Ａクラス16名についての結果

養護系（８名）→１位　保育実習（施設）４名；乳児保育４名、２位　児童福祉１名

障害系（８名）→１位　保育実習（施設）２名；パーフォーミングボデイ２名、２位　乳児保育１名

役に立った内容

１位　保育実習（施設）［４名＋２名］における感想

○授業で紹介された「先輩の体験談」の中で、「明るく接することが大切」という言葉が役に立った。

○先輩の体験談。実習初日は何をすればよいのか全くわからなかったので、先輩の体験談を思い出し、明るく積極的に子どもたちに関わったり、先生に何をすればいいのか聞くようにしたりしたことで対応できた。

１位　乳児保育　［４名（全員乳児院での実習者）＋１名］における感想

○乳児の抱き方、関わり方などが役に立った。

2009年夏実習（２年生）Ａクラス21名についての結果

養護系（16名）→１位　養護原理10名、２位　児童福祉２名、３位　保育実習（施設）１名；小児保健１名；教育心理学１名；家族援助論１名

障害系（５名）→１位　養護原理２名、２位　パーフォーミングボデイ１名；発達心理学１名

役に立った内容

１位　［養護原理　10名＋２名］における感想

○施設にはどのような子どもがいるか、どのような気持ちでいるか、という先生の話

○虐待についての話（子どもと接する上で、その子の過去のことを考えながら関われたため）

○施設についての説明（知識が増えたため）

○「施設は子どもにとって生活の場」と学んだこと

○授業で紹介されたいろいろな事例（実習での子ども理解に役立ったため）

○現場で働いていた先生の話

(4)実習前にやっておいてよかったこと

○「施設調べ」

○手遊びをたくさん覚えておいたこと

4　考察

上に述べた調査および統計的分析結果から、それぞれの仮説についての考察をおこなうこととする。

(1)施設実習を行うことについて、不安を感じていた多くの学生が、６日間の宿泊実習（通い実習も一

部含まれる）終了時には、「施設実習は意義があった」、また「実習を通じて自分が変化した」、と感じていることが今回の統計的分析（0.1%未満で有意な差があること）においても明らかになった。

一方、アンケートの自由記述から、１年生では「施設の実態、施設の生活についていろいろと知る事ができた。」、「施設について暗いイメージを持っていたが、実際は違い、子どもたちは明るい子が多いことが分かった。」「初めての体験（おむつ交換・食事介助など）をしたことでいろいろと学んだ。」「現場で実践と失敗を何度もすることで多くのものを得た。」「記録を書くことを通して振り返りができた。」など、初めての実習体験で学んだことが多くあることが実習の意義につながっているようである。２年生では、「保育園などでは見られない子どもの姿やいろいろな事情を持った子どもたちのことを知り勉強になった。」「様々な年齢の子どもたちと関わる経験ができ、施設がどのような所なのか分かった。」「幼稚園や保育園と全く違う生活の流れですごく勉強になりました。施設は子どもにとって『生活する場』である。その中にいる保育者は、親のようでもあり、お姉ちゃん、妹でもあるので、その点も、幼稚園・保育所とは違いました。」などといった記述にあるように、保育園・幼稚園での実習と比較しながら実習の意義について考えることができており、より広い視野のなかで、保育者の役割について学べていることがうかがえた。

⑵施設やそこで暮らす児童、利用者に対するイメージの変化、具体的にはマイナスのイメージ（例えば、児童のイメージが暗い、障害者の場合は怖い存在など）がプラスに変わったことが以下の学生の記述などから確認された。「施設に対する考え方が変わった。理由は、毎日ひとつの家族のように暮らしていて、いけないことも本当の子どものように職員の方が叱っていて愛情を感じたためである。」「障がいを持った方に対する意識が変わりました（実習前は公共の場で、障がいを持った方がいると、少しだけ怖かったですが、今は少しも怖くありません）。きっかけは、利用者の方々の笑顔や優しさです。」「実習に行く前までは、やはりこころのどこかに知的障害者の方への偏見があったような気がします。利用者の方と関わったことによって偏見をなくすことができました。また相手の気持ちになって考えるということをこころがけるようになりました。理由は、１週間利用者の方と接して、とても楽しい時間を過ごすことができたことと、職員の方を見ていて、楽しそうに仕事をしていたからです。」といったものである。

⑶実習施設において実習生が対応する対象者が、児童であろうと、障害のある大人（利用者）であろうと、基本的対応は同じであろうという仮説については、統計的分析において正しいことが証明されたが、学生の記述、例えば「自閉症の大人の方と接するのは初めてだったので、自分の中で壁がありました。実際に接してみると大人の方も子どものほうも変わらないことがわかり、考えが変わったと思います。」などといったものにおいても支持されていると考えられる。このように対象者の年齢や障害の有無を超えたところで保育者として学ぶべきことがあることが明らかになった。つまり、どのような社会福祉施設であっても保育者が活躍している限り保育士養成を目的とした実習施設として適切であることの裏づけになるといえよう。

⑷上記⑶にも関連するが、自分の実習する施設が、障害者の施設であると、保育者を目指しているのに何故、障害者（大人）の施設で実習をしなければならないのかと感ずる学生については、実際に実習をしてみることで、その考え方が変わるのではないかという仮説は、統計的分析によりおおむね正しく、実習後に考え方が変化し、実習の意義を見出せていることがわかった。保育実習（施設）担当教員として、知的障害者更生施設での実習が、保育所・幼稚園実習における児童への対応に加えて実施されることで、保育者を目指す学生の資質の向上、保育者としての幅広い対応力をつけるために役立つこと、つまり保育の対象者の年齢や障害の有無を超えたところで保育者として学ぶべきことがあることを経験的に感じていた筆者にとっては、知的障害者更生施設であっても保育者が活躍している限り保育士養成を目的とした実習施設として適切であることが統計的分析によっても裏づけられたと考える。

⑸実習生自身が、施設における実習を通して、自分がいかに恵まれた環境で生活しているかと感じられるのではないかという点については、先に紹介した「自分がどれだけ甘えているか，あたり前に毎日好きな時間にテレビを見たり、コンビニへ行けたりすることのありがたさを知り、いろいろなことに感謝をして毎日過ごせるようになった」や

「自分の生活が家族によって支えられていて、幸せなことだと思うようになりました」など、自分自身ではこれまで気づくことのなかった面への自覚がまず大切と考えられる。将来保育者を目指すものが実際の職務につく前に、施設には様々な事情を抱えた子どもたちや利用者が生活していることを知ると同時に、そこで自分自身が生活を共にしながら必要な支援をする経験は貴重である。施設実習体験は、このように、より広い視野に立ち柔軟性のある保育ができる能力を養成するためには欠かすことのできない内容を含んでいると考えられ、仮説は支持されたと考える。

⑹将来自分が施設で生活している児童や利用者に対して、何か出来ることはないかと感じたり、また自分自身が施設の職員として働いてみたい、と思うようにもなるのではないかという仮説についても、それを裏付けるように、例えば「今までは保育園や幼稚園の保育者になることだけ考えていましたが、少しだけ施設の保育者もよいと思うようになった」や「実習をしたことで、施設の保育士になりたいぐらい施設に魅力を感じた」といった感想が述べられている。このことは、いろいろな職場で活躍する保育者を自分の目で見ること、そして自分自身もその職場に身を置いて保育者の職務の大変さとやりがいを実体験できることが大きく影響しているという意味で、施設実習の有益性を物語っているといえよう。

⑺大学の授業において、保育実習（施設）は当然のこととして、どのような科目が実習生にとって役に立ったと感じているのか、また保育実習（施設）ではどのような内容が役に立ったと感じるのか、という点については、予想したとおりの傾向が認められた。授業科目としては「保育実習（施設）」や「養護原理」などが役に立つこと、そして保育実習（施設）の授業では、特に「先輩の体験談」が役に立っていることが明らかになった。養護原理の授業は、本学のカリキュラム上、２年生前期にあるため、２年生時に実習したもののみが「役に立った」と述べているが、施設で実習を受けるものにとっては、かなり役に立つ科目であることが確認された。

次に、今回のアンケートで新たに見えてきたことは、１年生時での実習と２年生時での実習には、それぞれに特徴があり、どちらの時期の実習にも意義があるということである。さらに統計的分析をすることで、１年生時の春実習の方が「自分自身の変化」という点においては、効果的でさえあることが明らかになったことは大きな成果である。以下に、その他の主な特徴をあげておきたい。

⑴２年生時に実習した学生は、１年生時で実習した学生と比較し、保育所実習などを経験しているため、それとの比較の上で施設実習を考えることができ、実習の意義についてもより広い視野で考えることができるようである。

⑵２年生時に実習した学生は、実習体験を通して、自分自身の生活や生き方についていろいろと考えることができているようである。

⑶１年生時に実習した学生は、当然のことではあるが、施設職員の方たちの言動から、いろいろと学んでいる様子がうかがえる。実習の意義についても、自分自身の変化についても２年生時での実習より大きな影響を受けていることが感じられる。当然のことではあるが、１年生は実習経験の少ない分だけ、実習前も不安が強く、何事にも不慣れではある。その反面、より新鮮な気持ちで、また先入観をもたず実習に取り組むため、いろいろな驚き、発見も多く、実習経験をきちんと振り返ることができれば、学ぶことが多いといえよう。実習の意義についての評価、自分自身の変化が大きいと感じるのも、そのような理由によるものと考えられる。

本学では、施設実習を受ける学生が多数に上ること、その一方で実習生を受け入れる施設には限界もあるため、春と夏に学生を分散させて、実習をさせていただくという形を取ってきた。本来は、２年生の夏に実習をさせていただくことが望ましいと考えているが、それが困難な状況の中で、１年生の終わる時期の春に実習をしてきた。そのためこの時期に実習をしてきた学生の学びについては、これまでずっと気にかかっていた。しかし今回の調査・研究をすることで、実習生の立場からみた場合という限定はあるものの、決してマイナスの面ばかりではないことが確認できたことも大きな成果であったといえよう。

今後、機会があれば、実習生を受け入れていただいている施設側の意見も参考にして、この点での理解を深めていきたいと考える。